

第四十七回 「全日本中学生水の作文福島県コンクール」入賞作文集

水について考える

主催 福島県

後援 福島県教育委員会、福島民報社、福島民友新聞社、
NHK福島放送局、福島テレビ、福島中央テレビ、
福島放送、テレビユー福島、ラジオ福島、ふくしまFM



「健全な水循環」

ロゴマーク

挨拶

水は、あらゆる生命を育み、多様な生態系を維持するとともに、大地に豊かな実りを与え、多彩で美しい自然環境をつくりあげるなど、私たちの生活には欠かすことのできないものです。

また、水は限りある資源であり、私たちの豊かな生活を維持していくためにも、水環境を守っていく必要があります。

本県には、猪苗代湖や裏磐梯湖沼群をはじめ、各地に豊かで美しい水環境があります。代々受け継がれてきた地域の宝を守り、後世に伝えていくことが重要です。

県では、水に対する関心を高め、一層の理解を深めていただくことを目的に、八月一日の「水の日」及び八月一日から八月七日までの「水の週間」における行事の一環として、「全日本中学生水の作文福島県コンクール」を昭和五十四年から毎年実施しています。

四十七回目を迎えた今回は、県内の中学生から五百二十四編の御応募をいただきました。

令和元年に発生した台風十九号での経験や、御家族から聞いた東日本大震災の話を通じて痛感した水の大切さ、学校での活動を通じて感じた水に対する思いや、日常生活での節水のための具体的な提案など、中学生の皆さんが、貴重な財産である水としっかり向きあつて真剣に考えていることが伝わってきました。

読者の皆さんには、この作文集を水について考えるきっかけとし、身近にある美しい水環境を将来に受け継いでいく貴重な人材となつていただけるよう願っています。

結びに、今回の作文コンクールに応募された多くの中学生の皆さんや担当の先生方に心から御礼を申し上げます。

令和七年八月

福島県企画調整部長 五月女 有良

目次

(作文は、各賞ごとに作者名の五十音順で掲載しています。)

優秀賞

「当たり前」の水	福島県立会津学鳳中学校	二年	稲垣 碧	1
水と共に生きること	いわき市立植田東中学校	三年	小松 志	2
水との関わり方	矢吹町立矢吹中学校	二年	須藤 旭	3
村で守られてきた「山水道」	昭和村立昭和中学校	二年	舟木 いろは	4
水との関わり	矢吹町立矢吹中学校	二年	諸根 さつき	5

入選

限りある資源を大切に	．．．．．	福島県立会津学鳳中学校	二年	大森 詞心	6
ホタルがいる川	．．．．．	西郷村立西郷第一中学校	二年	金田 莉佳	7
先人達からのバトン	．．．．．	福島県立会津学鳳中学校	二年	鹿山 芭	8
猪苗代湖の環境のために	．．．．．	福島県立会津学鳳中学校	二年	喜多見 七葉	9
猪苗代湖を守るためには	．．．．．	福島県立会津学鳳中学校	二年	齋藤 真優	10
みんなで守らなければいけないもの	．．．．．	矢吹町立矢吹中学校	三年	白坂 陽人	11
命の水	．．．．．	郡山ザベリ才学園中学校	三年	村岡 凜	12

優秀賞

「当たり前」の水

福島県立会津学鳳中学校 二年 稲垣 碧

喉が渴いたら、水を飲む。歯みがき、お風呂、トイレ……。様々なところで、水を使う。洗濯にも、食器洗いにも水を使う。私たちは毎日当然のように水を消費している。日本に住む私たちにとって、水を使うという行為は普通のことだ。蛇口をひねればすぐにきれいな水を使える。夏には水を利用してプールや海で泳げる。私はそのように水を使える状況が普通のことだと思っていて、疑問を抱いたことなど今までなかった。しかし、この作文をきっかけに水に関わる問題を調べてみると、水を不自由なく使えるのは、世界では「当たり前」のことではないと分かった。私が調べた中で特にショックだったのは、発展途上国の水事情だ。例えばエチオピア。なんとこの国では川で排泄をし、その川の水で洗濯をしているそうだ。その水を飲み水としても使っているため、衛生状態は悪い。そんな水でも、なければ生きていくことができない。そのため、女性や子供は水を汲むのに一日中時間を費やす。このような現状は子供たちの未来を大きく左右させている。毎日約八百人の子供が、汚れた水を主原因とする下痢で命を落としている。水汲みのため、学校に行くことができない子供たちもたくさんいる。生まれた国が違っただけで学校に行くことができるかできないか、さらには生きることができるとか死んでしまうのかまで変わる。水の影響は大きいのだ。エチオピアのような国々では、水は気軽に使えないというのが「当たり前」だ。水の心配などしなくても生きていける私たちは恵まれているのだと改めて思った。

しかし、「心配をせずに水を使える環境に生まれてこれなくて残念だったね。心配をせずに水を使える日本に生まれることができていたらよかったのね。」で済ませていいはずがない。日本のような国々とエチオピアのような国々の間で、水に対する「当たり前」の意識が違うのは、よい状態とはいえないのだ。

水を、日本に住む私たちは不自由なく使うことができる。しかし、私たちが自由に使えばいいということではないはずだ。そこで、私は

水に困っている国々のために何かできることはないかと調べてみた。すると、ユニセフなどの支援団体への寄付や節水、バーチャルウォーターの削減などができることが分かった。寄付と節水は「少し」の積み重ねが大切だそうだ。例えば、一人百円ずつ百万人が寄付すれば一億円になる。一日一リットルずつ一年節水すれば三百五十リットル以上になる。小さな一つ一つの力の重要性を感じた。バーチャルウォーターとは、食料を輸入した際の、その食料を育てるのに必要とした水の量のことだ。食品ロス削減、地産地消を心がけると輸入も減り、バーチャルウォーターの削減に協力できる。このように、個人の小さな努力が水に困っている人の役に立つ。そう考えると、今の日本の現状を「当たり前」だと思わず、日ごろから水に対して意識を向けることが大切だと感じる。

同じ地球に住む人々の「当たり前」の水が安心して、いつでも使える水になり、人々が平等に水の恩恵を受けることができるような社会を私たちは目指していくべきだと思う。まずは自分にできることを考え、できそうな小さなことから少しずつ始めていこうと思う、私たちは「当たり前」に使える水と共に。

今日も、いつも通りに水を使っている。それなのに、なんだか特別なことをしているように感じるのは、少し水を大切にしているからだろうか。

優秀賞

水と共に生きること

いわき市立植田東中学校 三年 小松 志

「今年もありがとうございます。美味しくいただきます。」

毎年十一月になると、秋田の祖父母から新米が届く。甘くふつくらとしたあきたこまちを楽しむのが我が家の恒例だ。そして、必ず母が言う。

「米は、半年以上かけて出来る自然の恵み。そこに人の手と愛情が加わると、おいしいお米になる。そして何よりも、水が大切なんだよ。今年も感謝だね。」

昨年の夏は猛暑で、暑い日が続いた。母の実家である秋田にお盆に行ったときは、いわきより更に高温で、とても暑かった。そんな中、田んぼの状態をチェックしていた祖父から、水の話も聞いた。

「冬に雪がたくさん降ったり、梅雨に雨が降ったりして、山に水が蓄えられる。今年もあの山からいい水がたっぷり注がれる。」山に適量の水があると、その根が土をつかんで、土砂崩れを防ぐ。また、土が水を蓄えることで、豪雨による災害などを避けられることも聞いた。祖父母が住む地域は田んぼがたくさんあり、用水路の整備や川の補修工事、田んぼの区画整備が進んでいることも教えてもらった。これらの話を聞き、僕が毎年楽しみにしている新米には、祖父母の経験に裏付けられた水についての知識が深く関係していると感じた。祖父母の大変さや自然の恵み、水の大切さに改めて感謝しつつ、いろいろなことをまた教えてもらうために、今度の長期休みにでも米作りを手伝いに行こうと、心に誓った。

水には、恵みとしての側面の他、災害としての側面もある。近年、異常気象という言葉をよく聞くようになった。猛暑、ゲリラ豪雨、線状降水帯、台風などの影響で、水害が発生し、人々の安心安全な生活が奪われることが増えた。いわき市でも、台風で川の水があふれた地域があり、復旧まで大変な苦労があったのを覚えている。僕はその時、ボランティア活動に参加した。水を吸い込んだ畳や布団を運ぶのがとても大変だった。

た。最近では、石川県の豪雨災害で亡くなった中学生のニュースを見て、胸が痛んだ。この異常気象は、地球温暖化が原因で、それを、利便性を求める人間が招いてしまっているのである。

地球は、水や酸素を蓄え、多種多様な生命体が生存できる唯一の惑星だ。僕たちは、生活の中で水を使い、体に水を取り入れながら生きている。水からの恩恵を最も受けているのは人間と言っている。その人間は、発電や発熱、車などの輸送手段の開発や利用を重ね、便利な生活を求め続けた。そして、負の副産物として、地球温暖化を招く直接的な要因である二酸化炭素をどんどん排出し続けている。同時に、温室効果ガスが地球をおおい、太陽の熱が閉じ込められることで、地球温暖化が年々進行している。二酸化炭素を吸収する存在である森林も、無計画な伐採が進んだり、山火事で破壊されたりすることで激減してきている。森の保水力以前に、森自体の保護を急いで解決していく必要がある。

引き起こした問題の原因が人間なのだから、人間には、知恵や実行力でその問題を解決していく責任がある。節水をする、電気の無駄遣いをなくす、食品ロスやゴミを減らす、目的をもったペーパーレス化をするなど、SDGsに結び付くような地道な取り組みこそがとても大事だ。一人一人が努力することはたとえ小さくても、積み重ねることで変わる。そう信じていたい。世界的に見ても、日本は自然豊かで、水に恵まれている国なのだ。水について考えることは、自分たちの未来を考えることに直結する。これからも、大好きな秋田の米を食べられるようにするために、今日も感謝を忘れず、地道な取り組みを当たり前のこととして続けていきたい。

優秀賞

水との関わり方

水の請求書を見た母が、般若のような顔をして弟を呼びつけた。耳をすまして聞いているとこうだ。弟は毎日お風呂に入る時シャワーを二十分間出したまま、別に水を使うわけでもなく遊びはじめる。母はそれに気づき注意したが、弟は水遊びを止めなかった。それにより水道代とガス代が大幅に上がり弟は怒られているというわけだ。なぜ母がこれほど怒るのか、それはお金のことだけではない。

二〇一一年三月十一日の東日本大震災で被災したからだ。母はその震災で、水に対する意識が変わったそう。東日本大震災があった時、ライフラインの断絶により、水の確保がとても困難になり、多くの被災者が十分に水を使うことができなかった。私が母のお腹にいた頃、住んでいた家が全壊し、借家で生活することになった。大きなポリタンクを二個持ち、当時はガソリンもなかったので町役場給水所まで大きなお腹を抱えて歩き、ライフラインが回復するまで毎日通った。給水所では皆イライラし、怒鳴り合う人もいたそう。そこにいたみんなは、家族のために水を確保することが、こんなに大変なことだとは想像もつかなかったと話していたそう。やっとの思いで汲んできた水、大切なその水を当時一緒に暮らしていた認知症の祖母が大きなジョッキにタブタブと入れ、一口飲んだと思ったらそのままシンクに全部流してしまった。母は声にならない悲鳴をあげた。この辛い経験から、母は水の大切さを日頃から私達に教えてくれていた。

ここで水道代の話をする。一般的な四人家族の水道代の平均額は六百九十六円だ。ちなみに私の家の一か月の水道代は約九千円だ。多分、弟のせいだ。ちなみに、アメリカの一般家庭の水道代は四十ドル、日本円でいう六千二百八十円になる。アフリカでは、日本人が使う水の四分の一以下しか手に入れることができない。さらに、水道から出る水は直

矢吹町立矢吹中学校 二年 須藤 旭

接飲めるものでもない。地域によっては全く手に入れることができない、お金では換算できない貴重な資源である。

ある記事を読んだ。それは途上国の水と衛生を支援する国際NGOウォーターエイドが、三月二十二日の「世界水の日」に「水はいくら？」世界の水の状況」というレポートを発表した。このレポートでは世界各地の「一日の収入に対する五十リットルの水価格の割合」が示された。

なぜ五十リットルか。これは世界保健機関(WHO)が定めた「一日に最低限必要な水の量」。五十リットルとは、シャワーであれば五分間、トイレの洗浄水であれば五回、家庭のバスタブでは四分の一程度の水の量だ。日本では、水使用量は二百八十九リットルと言われている。東京水道局調べによると、風呂、シャワーに百十五・六リットル、トイレに六十三・六リットル、炊事に四十九・一リットル、洗濯に四十三・四リットル、洗面・その他に十七・三リットル使っている。本当なら、必要最低限の使用量の五十リットル。私達はその何倍も使っている。この現実をどのように考え、受け止めていけば良いだろう。先ほど述べた「世界水の日」とは、川や湖の持続可能な環境保護を教え導き、各国の行動に繋げるため一九九二年十二月に国連総会で制定されたものである。

このように世界中で水問題が重点化されつつある。だがしかし、その考えが国民一人一人に届いているわけではない。

今後も、二〇二五年の「世界水の日」のテーマに注目し、世界がこれから水不足や環境についてどう考えていくのかを私もしっかりと受け止め、これから私達がどうすべきか、学校から、家庭から発信できることを考えていきたい。

優秀賞

村で守られてきた「山水道」

私の祖母の家には水道管が二つある。

「なんで水道が二つもあるの？」

私は祖母に聞いてみた。すると、祖母はこう言った。

「一つは、いろはの家にもついている、普通のお水が出てくる水道。こっちは『山水道』だよ。」

私の住んでいる村のお年寄りの家には、水道管が二つあり、一つは簡易水道で、もう一つは「山水道」だ。浄水場ができていなかった頃、村の人は自分たちの生活ができるように、山から水を引いてきた。そして自分たちの生活をその「山水道」で支えてきた。

なぜ山からなのか。川でもよいのではないのだろうか。村には川の水も豊富にあるけれど、川の水は思っている以上に汚い。では、きれいな水を手に入れるにはどうしたら良いのだろうか。山の上へ行くほどきれいな水が手に入る。そこで村の人は山の方から水を引いて、きれいな水を手に入れたというわけだ。

もし、あなたが、「水を飲みたいな」と思ったとする。そして水を飲みみ水道へ行く。片手には水を汲むためのコップを持っている。蛇口をひねる。そしてここでやつと水を飲む。

さて、ここまでの水を飲むまでの流れは、当たり前だと思ったことだろうか。しかし、なぜ蛇口をひねると水が出てくるのか。それは浄水場で水をろ過してきれいにし、そして各家庭まで水が行き渡るようにしているからだ。このように、現代はライフラインがとても充実している。この水を各家庭まで行き渡らせる過程で、エネルギーが必要になってくる。水をきれいにするためには多くのエネルギーを使うのだ。

とても充実した生活を送ることのできる現代でも、人々を困らせること。それは自然災害だ。災害は絶えない。災害がやってきたらどうなるだろうか。

昭和村立昭和中学校 二年 舟木 いろは

電気が止まり、もちろん水も止まる。しかし、そんな中でも「山水道」は止まらない。なぜなら、「山水道」は電気を使わないからだ。生きていくうえで水はとても大事だ。災害にあっても水が止まらないということは、災害を乗り切る一つの切り札でもある。このように災害にあっても水が止まらないのは「山水道」の強みでもあるだろう。

自分たちの目に見える範囲で水を管理することで、自然の恵みを直に受け取る事を実感することができる。また、自分たちで苦労して引いた水だから、水のありがたみが分かる。つまり、私の村では、自然の恵みへの感謝を忘れない事ができている。今もこの「山水道」は、春先に地区ごとで協力し、用水路をきれいに掃除して大切に長く使っている。

このように「山水道」は村の人にとつてとても大切なものだ。先に住んでいた村の人が一生懸命に引いてきて、この一本の管の中にも人々の苦労や喜びというものを作ってきた。だから、これからもこの「山水道」を可能な限り私達の手で守っていききたい。そして、この「山水道」とともに、どんな地域で、どんな文化生活が営まれてきたかを知ってもらいたい。

簡易水道の中にも作ってきた人たちの努力、喜び、悲しみ、様々なストーリーが隠されていることだろう。しかしこの簡易水道を作った人たちに、日々水を使っている私達は感謝できているだろうか。「自分たちで引いた水だからありがたみが分かる。」というのは生きている事にも感謝でき、とても素晴らしいと思う。生きているということが日々奇跡なのに、そのすぐそばにある水という奇跡に気がつかない。そんなこと、私はもったいないと思う。だから、この話を通して、「山水道」がある生活というものに興味を持ってもらうことはもちろん、そこから、日々生きていることへの感謝についても考えてもらえたら幸いだ。

優秀賞

水との関わり

私の家は畜産農家で、黒毛和牛を育てています。牛を育てるためには、水が必要不可欠で、私の家では地下五十七メートルから地下水を引き、約三百頭の牛がその水を飲んでいきます。

私も幼いころから牛の世話をよくしていましたが、牛は汚れた水を絶対に飲まないで常にきれいな水を飲める環境を保たなければなりません。その他、牛を育てるためには、稲わらが必要で、田植えをして、米を育て、収穫した後のわらを集めて牛に与えています。

米を育てるためにも水を欠かす事は出来ません。

水は天からの贈り物で雨や雪が降らないと農業は成り立ちません。自然の恵みで私達は生かされています。しかし、時にその自然が猛威を振るう事があります。

令和元年十月、私が小学二年生の時に台風十九号が日本列島に上陸し、私の家も甚大な影響を受けました。家の周りの川が決壊して氾濫し私の家と牛舎は川の濁流にのみ込まれました。私と姉達は避難していました。両親は、川が氾濫する直前まで牛達を高台に移動したりトラックに出来るだけ牛を詰め込んで一頭でも多く牛を助けるために手を尽くそうとしましたが、全頭助ける事は出来ませんでした。残された牛は生き延びた牛もいましたが、濁流に流された牛、牛舎の中で残酷な姿で亡くなった牛も少なくありませんでした。水の力はとてつもなく、牛舎の中は沢山の流木やがれきや刈り取った後の稲わらなど、その他沢山の泥で埋め尽くされていました。

牛舎や家の壁には二、三メートルの高さのある水害の跡が残っていました。幼かった私には、その状況を直ぐに受け入れる事が出来ず恐怖と悲しさで全身が震えた事を覚えています。

きれいな水を牛に飲ませるために母親の実家から祖父が何度も水を運

矢吹町立矢吹中学校 二年 諸根 さつき

んで牛に与えました。あの時の美味しように水を飲む牛の姿は忘れる事は出来ません。

牛舎の蛇口からきれいな水が出るまで数日かかりました。私も一頭一頭に水を飲ませる手伝いをしましたが、本当に水は貴重だと子供ながらに痛感しました。

あれから月日が経ち、我が家は困難を乗り越え両親は牛を水害から守るため高台に牛舎を建て日常を取り戻し、米、野菜を作り、牛を育てています。

現在世界各地で自然災害が起こり、苦しんでいる人々が沢山います。地球温暖化の影響だと言われています。これから先の地球の環境を良くするための行動を再認識して私が出来た事、節水、節電などを常に心がけて生活したいと思います。

水に感謝をして。

入選

限りある資源を大切に

福島県立会津学鳳中学校 二年 大森 詞心

私の家の近くには、大和川酒造という酒屋さんがあって、その近くには、わき水の流れる所がある。私は幼いころ、その水を飲んだことがある。水なのに甘くて、冷たくて、とても美味しかったというをよく覚えていた。それから、私は喜多方の水が大好きになった。

小学三年生のとき、「私たちの住む喜多方の自慢」と題して、総合の学習で喜多方の特色について調べた。調べていくと、喜多方市内のわき水が名水百選に選ばれていたり、喜多方で有名な喜多方ラーメンや米、お酒をつくる際に、喜多方の美味しい水が支えていたりしていたことを知った。私はそのとき、水は喜多方のよさもひきたてる、人々の縁の下のような存在だと感じた。

そんな水は、私たちの生活を支えてくれるが、有限な資源であるということも忘れてはいけない。ある日、私がテレビを見てみるとユニセフという機関のCMが流れてきた。茶色く汚れた水を飲むとする小さな子どもたちや、遠くまで水をくみに歩いたり、死となり合わせになりながら、危険な道を行こうとしたりする子どもまでいて、とても胸が痛くなった。CMを見て、ユニセフの活動に興味を持ったので、サイトをみてみると、海外で安全な水を手に入れない人は、世界で六億六千三百万人もいて、汚い水を飲むしかなく、毎日八百人もの子どもたちが亡くなっているということも分かり、とても悲しくなった。だからこそ、日本のように蛇口をひねれば水が出るという恵まれた環境で生活することができていることに感謝し、有限な水の資源を大切に使うことが大切だと感じた。

世界では地球温暖化も進んでいる。このままでは、さらに気温が上昇し、人間だけでなく、動物や植物までに大きな影響が及ぶということになってしまう。二酸化炭素を多く排出し、このような状況にしたのも、この状況を改善できるのも、私たち人間しかない。私たちは一人あた

り、一日に平均二百四十リットルもの水を使っている。その大量の水を少しでも節約することで、二酸化炭素排出量の削減につながり、やがて地球温暖化を防ぐことができる。節水は本当に小さなことだけれど、世界中の人々が協力し合い、みんなで少しずつ節水を積み重ねていけば、大きな力になっていく。だから、私も地球に生きる人間の一人として、責任を持って、節水に取り組み、生活していきたいと思う。

きれいな水を使えることは、当たり前なことではないということを考えるようになってから、当たり前のように飲んでいた水の重みを今までよりも感じるようになった。世界には、水を飲みたくても飲めない国はたくさんある。だからこそ、きれいな水を使えることに感謝し、限りある水の資源を無駄にすることのないように、今まで以上に工夫していきたいと思う。

入選

ホタルがいる川

西郷村立西郷第一中学校 二年 金田 莉佳

「ホタル見に行こうか。」私の家の裏には川があります。夏の始まり頃になるといとこみんなでその川へホタルを見に行くのが我が家の恒例行事です。「水」について考えたとき、初夏の夜に浮かぶたくさんのホタルが、一番に思いつきました。

その川の水はとても綺麗で澄んでいます。そして夏には水辺を吹く風は涼しく、このまま、一度日が沈んでしまえば、街灯もなく真っ暗になってしまいます。実は天然のホタルはそんな、光が届かず静かで綺麗な水辺を好むそうです。毎年ホタルを見ていますが、年々ホタルの数が減っているように感じています。そこで去年秋、その事を父に聞いてみました。「裏の川か。少し歩くとある中流近くの川の水はだいぶ濁ってしまっているんだ。」くわしく聞いてみると、土砂や草が多くなっていると役場に頼み、それらを取り除いたといいますが、約三十年前、この西郷村で大きな水害が発生して、大量の泥水と土砂が流れこみ当時の環境を壊してしまったのが大きな原因だと言っていました。水害が起きて数年は、生き物が姿を見せなくなっただけですが、年々、その生き物たちも増え始め、およそ三十年経った今では、川は汚れてしまっているものの、少しずつ元の姿に戻りつつあります。

汚れた水では成虫のえさになる綺麗な水も、幼虫のえさになる小さな貝もなく、ホタルはいなくなってしまうです。私の祖母や祖父はその川の水で、家でつくった野菜を洗ったり、冷やしたりもしています。その川が担っていることは他にもたくさんあるでしょう。

私は小学生のとき、地域の育成会で「水辺調査」という活動をしました。それも、もうずいぶんと前のことですが、そのとき、たくさんの生き物がいました。その活動のことを私はとてもよく覚えています。川の水に足をつけてみれば、心地の良い冷たさで、大きなあみを底にすべら

せてみるとたくさんの魚がピチピチと音をたてて、あみの上で跳ねるのです。「川」と聞けば私はこの情景を「当たり前」のように思い浮かべます。そんな当たり前が、当たり前ではなくなりつつあるのです。

私にとって裏の川は思い出そのものと言えます。夏になるとホタルを見に行き、冬になると川にかかった橋を渡つてずっと昔からある神社へ初もうでに行く。特別な日だけに限らず、日曜の午後、日がかたむきはじめた頃には父と弟と一緒に散歩へ出かけました。道の途中で拾った花をお土産に家へ帰ると、母は喜びその花がかれるまで花びんで生けてくれました。中学生になった今、部活や勉強が忙しくなり、そんな時間を作るのは難しいですが、部屋窓から少しだけ見える川が目に入ると励まされるような気がして、「頑張ろう」という気持ちがいってきます。私はこれからもそんな「川」をずっと守っていきたいです。そのためにはまず、「気づくこと」。そして、気づいてからどのように行動にうつすか、が大切だと私は思います。

私は今回、川にスポットライトを当てて書きましたが、私が気づいていないだけで、他にも身近にたくさん水についての問題があることでしょう。私はできるだけ多くの水についての問題について考えていきたいと思っています。

みなさんも、まずは一番身近なところから、一番よく知っているところから、問題に「気づく」ことから始めてみて下さい。はじめは小さな力でも、いずれ周りも気づきはじめ、それは大きな力になり、きっと問題解決へと導かれるでしょう。

次の夏、またみんなでホタルを見れることを心から願って。

入選

先人達からのバトン

福島県立会津学鳳中学校 二年 鹿山 芭

福島県の農業を支えている「安積疏水」を知っていますか。私は受験勉強をしていた時にこの言葉を知りました。福島県には全国四位の面積を誇る猪苗代湖があります。福島県の農業は、雄大な猪苗代湖の水と、それを流す安積疏水によって大きな発展を遂げました。

かつて猪苗代湖の水は、西にある会津地方に流れ、奥羽山脈が立ちはだかる安積地方には届いていませんでした。それに加え、安積地方では、年間降水量が少ないことにより水不足が起こるという深刻な問題もありました。猪苗代湖には水資源がたくさんあっても、活かされていなかったのです。このようなことが度重なり、江戸時代の福島農民たちは水をめぐって争うようになっていた歴史があります。

そんな中、どうにかこの状況を解決し、福島県の農業・日本の農業を良くしよう、猪苗代湖の水を原野に届けようと動いた人たちがいました。明治政府を動かす薩長藩閥の実力者、大久保利通と、そのバトンを受け継いだ多くの人の力によって「猪苗代湖の水を安積地方に引く」というビッグプロジェクトが実現されました。言葉にするのは簡単ですが、政府を説得し、資金を集め、人を動かすのは相当な苦労があったと思います。完成するまで三年という月日がかかりましたが、大久保利通は完成を見届けることはできませんでした。しかし「希望の水路」は大久保利通のバトンを受け取った様々な人の尽力で見事に完成するのです。

このビッグプロジェクトの恵みにより、福島県の米の収穫量は飛躍的に伸びました。農業を営む人々にとって、まさに希望の水路だったので。一本の水路は、田を潤し、人々の生活を豊かにします。稲を育てるということは、最終的に人の食・命につながります。

私は、春になみなみと水の張られた田んぼの脇を散歩しても、その水の原点はどこなのかなどと、今まで考えたことはありませんでした。川

には当たり前前に水が流れているし、水道をひねればすぐにきれいな水が苦勞せずに手に入ります。でも私たちにとっての当たり前が、先人たちの苦勞によってもたらされているということを心に刻まないとけないと感じました。

世界には簡単にきれいな水を手に入れることができない国がいくつもあります。水道が整備されていない国では、何キロも苦勞して重いみずがめを運ぶ必要があるし、清潔とは言えない水でも飲むしかない所もあります。それによって病気が流行ることもあるのです。

「きれいな水が飲みたいときにすぐに飲める・使いたいときにすぐに使える」という私たちの当たり前が当たり前ではない人もたくさんいるのです。

人間は水がなければ決して生きていけません。人間だけでなく、動物や植物にとっても水は生きるために必要不可欠なものです。

水資源を無駄にしない。節水を心がけて、川や海、水路を汚さない。私たちがすぐにできることは小さなことだけれど、一人一人が心がけて実践することで水のバトンを未来へつないでいくことができると私は信じています。

入選

猪苗代湖の環境のために

福島県立会津学鳳中学校 二年 喜多見 七葉

私は、猪苗代湖から二キロメートル以内の場所に住んでいます。通っていた小学校からは、とても近く、歩いてすぐに着くことができる距離でした。そのため、猪苗代湖はとても身近な存在です。

私の小学校では、総合的な学習の時間に、「水環境学習」というものがありました。猪苗代湖に流れる高森川、高橋川、硫黄川の水質を調べたり、水質を悪化させるヒシやヨシを回収したり、いろんな活動をしました。それらの活動は全て、湖の水質環境を守るためのものでした。

川の水質調査では、透視度、性質、環境状況、水生昆虫などを調べました。高橋川は、中性の川で、一メートルほどの透視度、林の中にあり、カワゲラやナガレトビケラなどがいました。たくさんのことを川ごとに調べました。調査の中には、バックテストなどの難しいことがあるなどしましたが、小学生の私は、それすらも楽しんでいました。

私が一番辛かったことは、ヒシ回収です。三年生から六年生まで、毎年回収していましたが、ヒシは減ることなく、年々増えていきました。浜に着き、遠くまであるヒシの大群をみるたびにため息がでました。それでも、五十人ほどでみんなで協力してがんばっている姿を見ると、自然とやる気ができました。四時間くらい集中していると、終了の合図が出ました。先生によると、合計で一トンくらい回収できたそうです。四年間、毎年一トンくらい取っているはずなのに、全く減らないヒシを見ると、悔しさがわいてきました。

また、ヨシ刈りもしました。二メートルくらいの高さのヨシをたくさん刈りました。私の家では、田んぼを作っていて、時々稲を刈る手伝いをしていたので、楽かなと思いましたが、重いし大きいヨシはとても大変でした。

ヒシ回収やヨシ刈りは、湖の水質を改善するために行っていました。ヒシは、くさるとヘドロになってしまい、水質が悪くなってしまう。

また、ヨシは、もともと砂浜だったところに生えているので、砂浜にもどすためでした。

昔、猪苗代湖の水質は全国一位でした。しかし、生活が楽になるにつれ、生活用水が汚れていきました。そのため、水質は悪化してきています。

私は、自分に何かできることはないか、と考えました。そこで、私は三つのことを思いつきました。一つ目は、せっけんを使いすぎないようにすることです。せっけんの中に含まれる有機物が、ヘドロとしてまっくってしまうからです。二つ目は、油汚れをふき取ることです。油を流すと、きれいな水にするには九万九千リットルが必要です。三つ目は、積極的に水質改善のイベントに参加することです。少しでも改善できるようにしたいです。

私の夢は、環境に優しい製品をつくることです。まだ、どのような製品かは決まっていません。でも、環境に優しい製品をつくり、川や湖、海をきれいにしたいという気持ちは変わりません。どんなところでも、生き物も人間も快適にすごせる環境をつくりたいです。

入選

猪苗代湖を守るためには

福島県立会津学鳳中学校 二年 齋藤 真優

私が住んでいる会津若松市の近くには、猪苗代湖という湖があります。毎年冬になると白鳥がやってきて、白鳥が猪苗代湖を泳ぐ光景は、言葉にできないほどの美しさです。私は毎年家族でその光景を見に、猪苗代湖へ行きます。行きの車の中では「今年も来てるかな。」と胸をはずませていました。そんな猪苗代湖に異変が起きていることを私は最近知りました。

それは、猪苗代湖の水質が悪化しているということです。平成十四年から十七年まで、猪苗代湖の水質の良さは全国一位でした。しかし、近年では水質の中性化によって、自然浄化機能という、汚染を自然の力で浄化する働きが低下しているのです。また、大腸菌群数の増加などにより、さらなる水質の悪化が懸念されています。私はこの事実に衝撃を受けました。なぜこのような状況になってしまったのでしょうか。

インターネットで調べてみると大きな問題が二つあることが分かりました。一つは猪苗代湖ではオランダ釣りというものが行われているということです。オランダ釣りでは、まき餌を使って釣りをします。そのまき餌が、水質汚染につながっていたのです。そしてもう一つは鳥への給餌です。猪苗代湖に行くときよく観光客や地元の人たちがカモなどに餌をやっている光景が見られます。実際に私もやったことがありました。その行動もまた、水質汚染を進めてしまっていたのです。このことを知った今では給餌したことを申し訳なく感じます。そしてこの二つの原因は、いずれも、長年の積み重ねによるものです。現在まき餌や給餌は期間や場所を限定したり、必要最低限にするように呼びかけたりなどの対策をしているようですが、やはり一人一人が気を付けていかないと、この問題は悪化してしまうのではないかと思います。もしこのまま悪化してしまつたらどんな影響が出るのか調べてみると、猪苗代湖にとってとても

重要なものたちに害がでてしまうことが分かりました。

それは湖で暮らす生き物です。水質汚染によって小さい魚が減少し、それによってその魚を食べる生き物も減少します。この連鎖によって湖全体の生き物が減ってしまうのです。猪苗代湖の生き物が減ってしまう状況なんて考えられません。猪苗代湖の水質がこれ以上悪くなるのはさけなければいけないと考え、自分にできることを考えました。

それはボランティア活動です。猪苗代湖のボランティアを調べてみると、猪苗代クリーンアクションというものがあるということが分かりました。そこでは、沿岸での清掃活動や漂着水草の回収などを行っています。また、活動に参加しなくても、自主的に沿岸にあるゴミを拾ったり、自分のごみは自分で回収したりなどの小さな行動でも少しは猪苗代湖のためになるのではないかと思います。

猪苗代湖は私にとって思い出がたくさんある、とても大切な湖です。だからこそ、これ以上水質汚染が悪化しないように、ボランティア活動や自主的な行動を、日々続けていきたいです。

入選

みんなで守らなければいけないもの

矢吹町立矢吹中学校 三年 白坂 陽人

僕はいつも、水を持ち歩いている。それは、喉が渴いたり、咳が出たりしたときに、水を一口飲むことで解決するため、持っているだけで安心するからである。この作文を通して、水がどんな存在かを考えたとき、とても身近なもので、生活になくてはならないものであることを再確認した。だから、いつも当たり前前に飲んでいる水がどのようにして手元に届くのかを調べてみようと思った。

調べてみると、最初は水源の形成から始まる。自然界の湧き水や地下水が、岩や土壌を通る過程で、鉱物や微量元素を吸収する。この中でも衛生状態の保たれた良質な水だけが飲料水の原水となり、製造工場にて水質検査が行われるそうだ。次に、ろ過、沈殿、加熱殺菌の過程がある。自然のフィルターである砂利や石、土壌を通過し、雑菌や不純物が取り除かれ水質を整える。多くの飲料水はその後で加熱殺菌を行う。水の水質は工場で管理されると思っていたけれど、人の手だけでなく、自然の力を使つてろ過や沈殿が行われていることに驚いた。また、この処理を終えて初めて、水は「ナチュラルミネラルウォーター」と呼ばれる。これから、品質の安定を目的として、ミネラルの調整や混合などが行われ、これらの処理を終えると「ミネラルウォーター」と呼ばれる。これらの段階を踏まえて、ボトリリングの工程にはいる。ミネラルウォーターは、清潔な環境で瓶詰めされ、この段階で検査を行い、品質を管理される。その後ようやく、販売され、ボトルに詰められたミネラルウォーターは、消費者の手に渡り、飲用できるようになる。ミネラルウォーターが販売されるまでには、こんなにもたくさんの工程を行わなければいけないことを知ることができた。また、自然界の湧き水や地下水があつて初めて、ミネラルウォーターができる。そのためには、自然環境を守ることが大切だが、最近、世界全体で起きている温暖化や水不足などで安全な水を

手に入れることが困難な状況にある。

こうした問題に対して、僕たちは一人ひとりができることは何かを考えることが重要だと思った。まず、日常生活における水の使い方を見直し、無駄な水の使用を減らすことが大切だ。例えば、シャワーの時間を短くしたり、洗濯機や食器洗浄機を活用して一度に多くの洗濯物や食器を洗うことで、使用する水の量を減らすことができる。また、水道の蛇口を開けっぱなしにすることをやめるだけでも、水の消費を大きく減らすことができる。さらに、水資源を守るためには、環境保護にも配慮しなければならない。森林の伐採や、工業廃水の排出などが、水質汚染の原因となつている。僕たちが自然環境を守り、水源地の保護に努めることが大切だ。また、雨水の貯水や廃水の再利用、浄水技術の向上などの対策も進められている。これらの努力によって、少ない水資源でも効率的に利用することが可能となつた。

水は、僕たちの生活において不可欠な存在であり、その重要性を知ることが大切だ。水の利用における問題は世界中で深刻化しているが、僕たちの一人ひとりの意識と行動が、水資源を守り、持続可能な社会を築くことにつながると思う。水を大切に使い、無駄を減らし、未来に向けて水を守ることが僕たちの責任であると考えた。

入選

命の水

郡山ザベリオ学園中学校 三年 村岡 凛

水は「生命の水」と言いますが「生命を奪う水」でもあります。それは、私実際に体験したことがきっかけでそう強く思ったからです。今から五年前の十月。私は学校が休校だったこともあり、母方の実家がある、いわき市を訪れていました。ニュースでは台風十九号が接近していることは知っていましたが、よくある台風の一つととらえていました。

十月十二日。夜になるにつれて雨脚と風が強くなり、おじいちゃんも雨が気になって、裏の川の水位をちょこちょこ見に行っていました。お母さんの実家の裏には好間川という川がありました。ただ、おじいちゃんが生まれた時から今まで、裏の川が決壊したことはないということをおじいちゃんから聞いていたので、少し安心していたことを覚えています。時々外を見ては、まだ地面が見えている・・・ああどうしよう、庭が海になっている・・・そして、夜九時。とうとう玄關まで川の水が迫って来てしまいました。そうです、裏の川が決壊したのです。前にニュースで、あつという間に水が上がつて来て、逃げられなかったという体験談を聞いたことを思い出しました。本当に水が上がつてくるのはあつという間です。気がつくとおじいちゃんとおじさんの姿がありません。その状況を心配していると、おじいちゃんとおじさんは腰まで水に浸かりながら、近所のおじいちゃんとおばあちゃんを助けに行つて、おんぶをして戻って来ました。一人暮らしや平屋のお家に住んでいる方は、きっと恐怖で怯えていたと思います。おじいちゃんとおじさんの行動は、文章で書く这么简单に思えますが、これは私にはマネできない勇氣ある行動だと思いました。でも、一歩間違えば、どちらか一方、または両方が亡くなるケースもあるので、どういった行動が正解なのかは、今の自分には分かりません。おじいちゃんの家は二階建てなので水に浸かると壊

れてしまいそうな家電製品等をみんなで二階に運びました。電気も停電し、真っ暗な中の作業です。この時、電気の灯りが人に安心感を与えるものなんだと改めて感じました。灯りがあれば、きつと作業も進むことはもちろん、一番は気持ち的に前向きになれたかと思っています。夜中になつても台風は弱まることなく、家や車を飲み込み、辺りには助けを求める声や車の警告音がずっと鳴り響いていました。その後、台風が落ち着きをみせた頃、自衛隊の方達が、ボートに乗つて、救助に来てくれました。それは、とても異様な光景でした。辺りを見渡すと、よく自転車で遊んでいた駐車場も、よく買いに行っている自動販売機も、何もかもが水の底にあります。私はただただ、この先どうなってしまうんだろうという不安しかありませんでした。朝になって水が引き、これからは、掃除との戦いです。水によつて起きた被害を水で甦らせるのです。なんとも皮肉なことです。私たち人間は、やはり、水に頼らないと生活できないのです。

この豪雨により、多くの尊い命が失われ、広範囲にわたつて床上浸水や土砂災害も起き、住家被害が起きました。浄水場も被害を受け、そのため断水も続きました。「人災」は防ぐこともできませんが、「自然災害」は防ぐことができません。でも、それに備えることはできます。日々当たり前のように使っている水は、生きるために必要でもあります。時として、人の命を一瞬で奪う水でもあります。私たちができることは「水について知ること」。

私もこの機会に、家や友人と話し合い、水の大切さや減災に繋がる入口を考えてみたいと思います。

第４７回「全日本中学生水の作文福島県コンクール」の概要

第４７回「全日本中学生水の作文福島県コンクール」は、県内の中学校１０校から５２４編の作文の応募があり、その中から入賞者１２名、学校賞４校を選定しました。

＜応募作文数＞

(単位：編)

中学校名	２学年	３学年	計
福島県立会津学鳳中学校	86	0	86
いわき市立植田東中学校	20	18	38
昭和村立昭和中学校	4	0	4
須賀川市立第一中学校	30	39	69
須賀川市立仁井田中学校	1	0	1
西会津町立西会津中学校	0	1	1
西郷村立西郷第一中学校	42	0	42
矢吹町立矢吹中学校	136	111	247
石川義塾中学校	12	0	12
郡山ザベリオ学園中学校	19	5	24
計	350	174	524

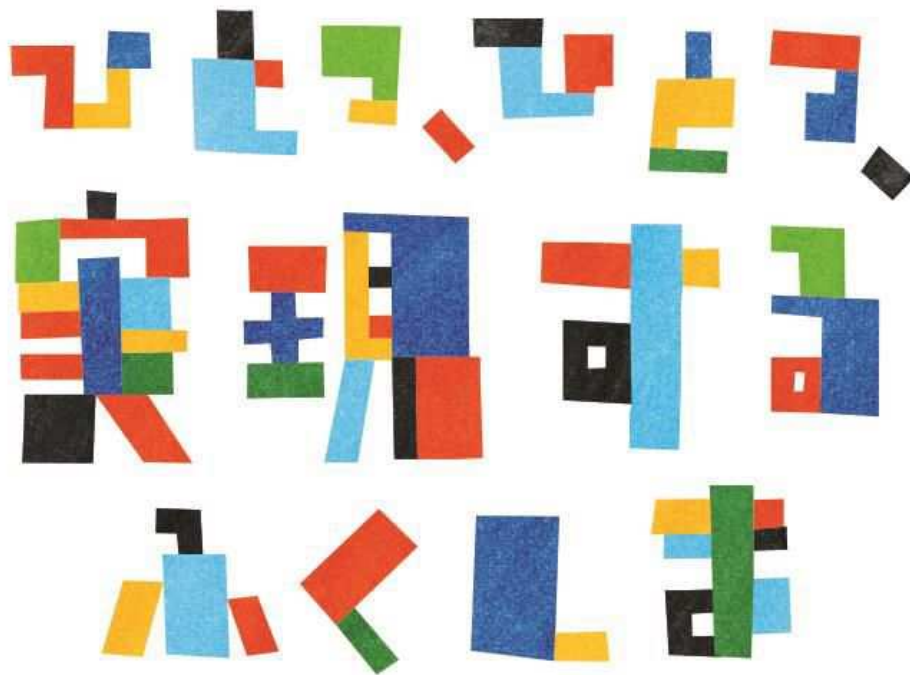
(県立中学校、市町村立中学校、私立中学校の順で、学校名５０音順表記)

＜学校賞の授与＞

学校賞には、優秀な作文を多数応募した学校又はコンクールに積極的に取り組んだ学校を選定しています。第４７回「全日本中学生水の作文福島県コンクール」では、以下の４校を学校賞に選定しました。

福島県立会津学鳳中学校、昭和村立昭和中学校、須賀川市立第一中学校、矢吹町立矢吹中学校（県立中学校、市町村立中学校の順で、学校名５０音順表記）

参加いただいた中学生の皆さん、そして御協力いただきました先生方に、厚く御礼申し上げます。



福島県企画調整部

土地水対策室

電話 (024) 521-7123

HP: で検索



※ふくしまの水に関する情報を掲載しています。

本事業は、福島県森林環境税を活用して実施しています。